

障害者支援活動における行為者の活動への意味づけ

—障害者支援活動に対する調査から—

一橋大学大学院社会学研究科後期博士課程 加藤旭人

1. 目的

本報告の目的は、障害者支援活動を行う任意団体 X 会を事例として、その活動が行為者によっていかにして意味づけられているのかを明らかにすることである。

障害研究における市民活動は、一方では障害者差別に対抗するための拠点としてその可能性を評価されつつも（要田 1999）、他方ではその活動における障害者差別の「問題の内部処理」が批判されるなど（石川 1992）、両義的な位置づけがなされてきた。

本報告では、以上の評価を踏まえつつも、障害者支援活動が行為者によっていかにして意味づけられているのかという観点から、活動の担い手や参加者の実践に定位しつつ、障害者支援活動が継続されていることの意味を検討する。

2. 対象と方法

本報告で対象とするのは、障害者支援活動を行う任意団体 X 会である。任意団体 X 会は、1992 年に知的障害者とその家族を中心に結成された。現在では、当事者、家族、支援者、ボランティアなど多様な人々によって活動が担われ、「共に育み合う仲間として、多くの地域の人々と交流できる活動を行う」（X 会会則より）ことを目的として活動している。X 会は、地方自治体から、社会教育事業の委託という形で、支援を受けており、毎月第二土曜日と第四土曜日の午前中、公共施設において、障害者、家族、支援者、ボランティアなどが集まり、音楽活動やスポーツ活動を行っている。

本報告で用いるデータは、任意団体 X 会に対する参与観察およびインタビューによって得られたデータ、及び X 会が発行するリーフレットや報告書である。報告者は、2014 年 10 から現在まで、任意団体 X 会に対して、ボランティアとして関わりながら継続的に参与観察を行っている。

3. 結果

分析の結果、以下のことが明らかとなった。第一に、X 会の活動は、「地域」という共通する意味づけがなされていた。これは、障害当事者、支援者、家族、ボランティアが多様な人と出会い関わり合うことを積極的に位置付ける実践だと言える。第二に、しかしながら、「地域」という意味づけは、必ずしも一枚岩なものではなかった。なかには、ボランティアという形での無償労働に動員されることに対する批判、普段関わっていない人と出会うことへの不安や違和感など、対立やずれを含んでいた。

4. 結論

「地域」という意味づけは、多様な行為者が共有可能な一致点であり、この点において「地域」という意味づけは多様な行為者が共に活動を行うことを可能にする基盤である。しかしながら、その一致点は、共通項のみでなく、ずれや対立や矛盾を含みながら、それぞれの担い手の相互交渉のなかで、共有されていた。すなわち、さまざまな行為者による相互交渉によって「地域」という意味づけがなされるなかで、障害者支援活動が継続していることが明らかとなった。

【文献】

石川准, 1992, 『アイデンティティ・ゲームー存在証明の社会学』新評論.

要田洋江, 1999, 『障害者差別の社会学—ジェンダー・家族・国家』岩波書店.